

るようなものが、場合によったら8世紀、9世紀あたりに出ていたのではないかという憶測も肯定できるのではないかと思ったのです。

断片的な記事なのですが「文徳実録」の記事で仁寿2年、西暦852年に、国司の介である人物が、今まで誰も手をつける事が出来なかった低い堤防に対して徹底的な工事をして、堤防を高くし灌漑をしやすくしたという記事があります。こういう断片的な記事なのですが、そういったものを拾集していきますと、かなり古い段階において群馬のこのあたりで、大工事が行われていても不思議ではないと、古代の文献を日頃読んでいる立場から感じたわけです。

報告の中で水にかかわる神の話が出てきました。信仰の話は突き詰めれば、人間の精神にかかわる事でありまして、私の興味のあるところなのです。特に金山城の「日ノ池」「月ノ池」が信仰の対象になっていたという話を非常に面白いと思いました。岩松家純が金山城を作る時に信仰の対象である「日ノ池」を包み込んだというのは、まことに面白いと思った次第です。

私は地名にも多少関心がありまして、その一つに今日出てきました「<sup>じゅうどの</sup>重殿」という地名があります。重殿というのは水の神様、水神様というところまでは分かるのですが、それ以上は分からないところが多いのです。重殿という地名の分布は群馬、埼玉、東京、千葉、そして茨城の方にもあります。その中で濃密に分布しているのは群馬、埼玉、東京になります。古い国名でいいますと、上野と武蔵ということになります。報告を伺っておりまして、岩松家純が水の信仰に対して関心があったということから、どうも新田の水の信仰が元になって、重殿の神様を、水源地帯、あるいは取水口などでお祭するような事が始まり、それが出発点になって南の方へ広がって行ったと考えられるのではないかというアソシエーションがうかんできました。いいかげんな事を言うなという人もいるかもしれませんが、今日の話聞きまして、この連想、必ずしも悪くないんじゃないか、という思いをもったわけです。この地域では

鎌倉時代になりますと、新田一族の岩松氏が勢力を持ちます。その岩松氏は畠山氏との関係でもって、武蔵の方に所領を持ち、武蔵方面に関係が生まれます。また新田義貞が鎌倉攻めをして鎌倉幕府を倒しますが、この関係でも新田氏恩顧の武士が武蔵国には多くなり、影響を及ぼしているわけです。そういったことから新田氏が始めた水神様信仰、重殿信仰が南下していったのではないか、という思いを非常に強くしたわけでありまして。先日、能登さんに案内されまして、このあたりの泉を見学するチャンスに恵まれました。その泉を見ますとモコモコと水が湧き出ているんです。あれを見てやはりこのあたりが重殿信仰の起源の土地にふさわしい、と考えたくなるのです。もっともこれは印象的判断で、学問的に根拠のある話ではありませんので、後々私も考えていきますし、皆さんにも考えて頂いて、教えていただきたいところです。

水の関係では今日は十分に触れられなかったテーマに舟運があります。中世末の舟運の在り方に注目します時、関東では女体社というものが取りあげられることがあります。この女体社というのは、船の中に祭られる船の守護神である<sup>ふなだま</sup>船霊に関係します。この女体社が中世の終わり頃関東で目立ってきます。濃密に分布しているのは、多摩川のあたりから古利根川の下流あたりです。地名で言いますと、埼玉の越谷、春日部、あるいは、さいたま市の東方の見沼の周辺などです。この女体という地名が群馬にも残っています。ざっと調べたところでは、三つほど見出すことができたのですが、具体的には前橋の南、<sup>くでん</sup>公田のあたりと、伊勢崎の<sup>つなとり</sup>連取、それに太田の内ヶ島です。太田には女体山古墳というのがあります。船にかかわるこの地名ですが、前橋と伊勢崎では利根川のすぐ近くになります。しかし太田の内ヶ島は河川からは離れておりまして、利根川には関係ないように見えます。ただし、江戸時代の年貢の納め方を見ますと、内ヶ島の年貢も太田の南方の利根川の河岸である古戸まで運んでいって、そこから船で江戸まで運ぶのです。つまり内陸なのですけれ